

美しい景観を見直す動きが世界に広まっている。

静岡県においても富士山の世界文化遺産登録以来、地域の景観価値を住民とともに高めようとする動きが始まっている。

川勝知事と東京大学の武内和彦教授が「地域総がかりで静岡の美しい景観を未来につなぐ」をテーマに語り合った。

人の営みがあつてこそ景観

**知事** 今日の本県にお越しいただき、誠にありがとうございます。

最近、景観という言葉をよく耳にします。美しい景観を取り戻そうという運動は日本で始まったというより、海外のどこかで関心が高まり、国際的運動になって、日本でも、静岡においても、本格的に議論され、実践されるようになりました。先生は景観について造詣が深いので、そのあたりの経緯を紹介いただけますか。

**武内氏** 川勝知事、どうもありがとうございます。

「景観」という言葉は、英語で「ランドスケープ(Landscape)」といわれています。この言葉は千年以上も前からある高地ドイツ語の「ラントシャフト(Landschaft)」という言葉に由来します。これを日本語に直訳すると「土地共同体」です。つまり、土地があつて、コミュニティがある。この2つが結びついたものが「ラントシャ

のように思います。

**武内氏** 江戸末期にいろんな外国人が日本を訪れ、そういう人たちが江戸の風景に感動し、田園都市という概念を展開したということを知事はよくおっしゃっています。日本の美しい風景が世界に広まったということでしょうか。

**知事** 田園都市は「ガーデンシティ(garden city)」の日本語訳ですが、その言葉がいつ、どこで生まれたのかといえば、幕末・維新期に来日した外国人の言葉です。江戸には当時約100万人が暮らしていましたが、路地にはアサガオが植えられていたり、植木鉢があつたり、大名はみな美しい庭園を持つていました。その光景を見た、イギリスの外交官オールコックが、「これはガーデンシティだ」と言ったのが始まりです。1900年頃からイギリス流のガーデンシティがレッチワースやウエルウィンでつくられました。

その後、渋沢栄一が「西洋でガーデンシティがはやってい

# 地域総がかりで静岡の美しい景観を未来につなぐ

東京大学教授

たけうちかずひこ

武内和彦氏



静岡県知事

かわかつ へいた

川勝平太

フト」、つまり「景観」です。

景観というと風景を連想する人も多いでしょう。なぜ「風景」なのか。その背景にあつたのは16世紀から17世紀にかけて、オランダのフランドル地方で、農業を中心とした人々の営みを絵に描く画家たちの運動です。それが「風景画」と呼ばれるようになり、やがて、風景画はブームになり、人々が「ああ、そういうものが美しいのだ」と認識するようになって「景観」という言葉が使われるようになりました。したがって強調したいのは、美しい景観の背後には、土地とそれを支える人の営みがあるということなのです。

**知事** なるほど、景色の中に土地の人がいて、それを含めて「景観」ということですね。日本には「山水画」があります。山水画の中には仙人のような人物が描かれています。また、江戸時代の安藤広重は「東海道五十三次」で、各地の景観を人とともに描いています。日本人は、あまり自覚しないまま、土地の人を景観の1つとして見る文化を持っていた

る。日本でも「つくりくろ」ということで「田園調布」をつくります。もともとは日本にあつたガーデンシティが海外に持ち込まれ、それが日本に田園都市として回歸したのです。

「里山」自然と人工の調和

**知事** 「里山」という言葉がありますね。先生は「里山」をアルファベットで「SATYAMA」と書いてタイトルにした英書も出されています。先生が里山に気づかれたきっかけは、何だったのですか。

**武内氏** 大事な自然は守るべき。そして、もう都市に自然はないので、諦めて人工的な環境を整備しよう。長年自然についての研究していると、こうした2つの考え方が支配的であることに気づきました。しかし、実際はその中間領域こそ、人と自然が共存できる空間なのではないのか。そしてその考え方を日本人と自然の関わりの基本に置くべきではないのか。そう私は思っていました。そこで出会ったのが「里

山」という言葉です。

里山という考え方は「自然か人工か」ではなく、その両方の良い組み合わせです。しかし、今の日本は自然と人工が分離していて、二極分化に走っている気がします。例えば街はどんどん人工化する。一方で自然はどんどん荒れていく。そうではなく、街の中にも自然が入り込む。そして自然も人が手を加えることで「自然としての価値」を高めていく。こうした両方の施策を合わせて展開していくことが重要だと私は常々訴えています。

**知事** 4年前、静岡県の内陸側に新東名高速道路が開通しました。県内の中山間地を東西に走っています。自然豊かな中山間地域に新東名高速道路ができたことで、物流拠点や工場が建ちます。工場が建てば人が住み、町ができてきます。その生活の中に、花や樹木などの潤いを備えていけば、ガーデンシティ、あるいは里山の景観になると思っています。

一方、都市部にも緑は大切です。電信柱を埋設して街路樹を植え、壁面緑化や屋上緑化で緑を増やすなど、さまざまな工夫の描いた絵が、海外の人々のイメージの中に生きていたということです。

この美しい景観イメージを大切にし、三保松原を世界遺産にふさわしい景観にするため、まずは街道の電線、次に松林を修整することにしました。以前、松の木が5万数千本あるとされていましたが、実際には危機意識を持ちました。三保松原は富士山と一体です。それに応じた景観を取り戻す必要があります。これは先人への恩返しであり、未来の子供たちのためでもあります。

**武内氏** 私も、いろんなところを見ていって、気になるところが多々あります。例えば、農村地域の中にいきなり工場があったりします。資材置き場になっていたり、廃棄物が放置されていたりすることもあります。こういう状況は残念ながら、静岡で見られることもあります。もともとの発想からいうと、土地とそこを支えている人たちというのは、合わせて公共財であるという考え方が必要です。

をして、自然物と人工物の両方に手入れをする、こうした社会運動を先生の指導の下でおこしていこうと思っております。

景観を公共財として認識する

**武内氏** 私は知事が掲げる「美しく品格のある邑づくり」で静岡にたびたび来ています。いろんな邑を見ていくと、以前には



東京大学教授  
武内和彦氏

東京大学サステイナビリティ学連携研究機構構長・教授、中央環境審議会会長（環境省）、世界農業遺産専門家会議委員長（農林水産省）、静岡空港周辺地域の理想のまちづくりを考える懇話会座長（静岡県）、ふじのくに美しく品格のある邑づくり推進委員会委員長（静岡県）、などを歴任。

気づけなかった魅力があることに気づきました。例えば新幹線、東名、新東名などから横つなぎに見ることのできる景色が静岡の景観だと思っていたのですが、実際は川が深く、奥までどんどん入っていくと、まったく違う静岡の魅力がある。本当に勉強になりました。

「これは私の土地だから何をしてもいい」という考え方は見直していくべきです。地域の皆さんが公共財としての景観価値を認識することが特に大事だと思います。

**知事** そうですね。私たち全員が、建物は私有物でも、その外観は公共性を持っているという自



静岡県知事  
川勝平太

覚を持つことが大切です。最近では、工場の周りを緑化する動きも出てきました。単なる緑化ではなく、建物を周囲と美しく調和させるという動きも出てきています。少しずつですが、公共財としての自覚が出てきたのかもかもしれません。

景観とは生活様式である

**知事** 例えば安倍川は、日本で最も勾配のきつい川の1つで、山がすぐそばまで迫っています。また、大井川、天竜川、富士川、狩野川、そのほかにも大小の河川があり、内陸部に入れば、平野とは違う、豊かな里山の景観が広がっており、多様な文化が息づいています。

昔、京都から東海道を下って流域に住みついた人が「もう少し上流に洪水に邪魔されないところがある」と考えて川をさかのぼっていきます。やがて生活が安定すると、その人たちが持っていた都の文化が、そのままその土地で永久保存されます。たとえば天竜川を上っていると、古い文化が息づいており、

**武内氏** 私は地理学を勉強して、その後環境学を専門にするようになったのですが、地理学でよく言われていることを紹介したいと思います。それは「景観とは生活様式そのものである」ということです。表面的な美しさだけが大事なのではなくて、人の暮らしがおのずから美しさ

を醸し出していくような、そういう美しさが本当の意味での景観なのだと思います。

**知事** 「景観とは生活様式そのものである」という、すばらしいメッセージをいただきました。生活様式というのには「way of life」の堅苦しい翻訳です。「生き方」とも訳せます、平たく言えば「暮らし」

日本の歴史をさかのぼれます。

**武内氏** 今、知事は文化とおっしゃいましたが、景観の議論をする中で、文化はとても重要な要素です。三保松原がなぜ富士山と一体なのか。そして、なぜ世界文化遺産になったかという、文化がないでいるからです。ところが、西洋的な価値観でいうと「あんなに地理的に離れたものが一体であるはずがない」ということになりません。しかし、知事がユネスコ会議で「一体である」ことを主張し、結果的に世界中の人が賛成してくれました。

**知事** ユネスコ会議では出席者全員が賛成意見を表明しました。それは世界遺産委員会で史上初だったそうです。私は「こんなに日本は愛されているのか」と感動しました。

**武内氏** 三保松原と富士山を一体的に描いた絵が多数あって、それをみんなが知っていたということですね。

**知事** そうです。例えば富士宮市の浅間大社にある「富士曼荼羅図」には、三保松原と富士山が一体的に描かれています。先人です。暮らしにおける生き方には人の心が表れているので、暮らしは人の心の表現です。ですから、景観は、その地域の人々の心の表現であり、それが醜いということとは恥ずかしいことだと思わなければなりません。「景観は生活様式そのものである」というメッセージは、日々の暮らしから景観をよくしていくということにつながります。それぞれの地域の特性は違うので、多様性という言葉がキーワードだと思います。人の生き方はそれぞれ多様です。それを心得て地域づくりをしていきたいと思えます。

**武内氏** 川勝知事のリーダーシップで「ふじのくに」が、本当に美しい景観にあふれる地域になることを期待したいと思います。

**知事** 先生、どうもありがとうございます。これからもご指導ください。

**武内氏** こちらこそ、どうもありがとうございます。